

要 旨

本研究は、学級活動の話合い活動を通して、共感的人間関係を育む指導の在り方を探ったものである。共感的人間関係を、他者を受け入れ、安心して自分を表現できる人間関係と捉え、ペアで話合いを行う中で、相手の考えを受け止めたり、自分の考えを素直に伝えたりする姿を目指した。その際、相手の考えを引き出し、それを記録するためのプロセスシートや、相手のよさを認めるためのほめるカードとメッセージカードを用いた。その結果、共感的人間関係が育ち、自他の向上を目指した自己決定ができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①共感的人間関係 ②プロセスシート ③自己決定

1 研究の目標

自他の向上のために積極的に活動する生徒を育成するために、学級活動の話合いの場面において、生徒指導の機能を意識した指導・支援の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

現代社会では、子どもが人と関わる経験が減少している。また、中学生の間では、ネット上での様々なトラブルが増え、希薄な人間関係が浮き彫りになっている。このことから、他者との関わりの中で自分がどのように行動したらよいのかを、適切に考えることができない子どもたちが増えていると考えられる。このような背景がある中で、平成20年1月の中央教育審議会の答申において、特別活動の課題として、「集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合って解決する力の不足が顕著になっている」¹⁾ことが挙げられた。今後、より大きい集団の中でたくましく生きていくために、学校、学級の集団生活が向上するにはどうしたらよいのかを積極的に考え、実践していく力は、生徒たちにとって必要不可欠なものであるといえよう。その力を培うため、学校、学級生活での諸問題を自分のこととして考えさせる話合い活動を行いたいと考えた。

所属校は、数年前から、生徒会活動で「一人一役」を推進し、生徒の所属感を高め、学校をよりよくしていこうと取り組んでいる。担当していた2年生171名を対象に5月に実施した「Q-U」アンケートの結果では、「クラスで行う活動には積極的に取り組んでいるか」という質問に、「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えた生徒は54.4%(93名)であり、約半数の生徒しか、積極的に学級の活動に取り組んでいないことが分かった。学級のために活動する意欲が足りない要因として、土台となる人間関係の希薄さがうかがえる。このような生徒の実態から、一人一人が安心感をもち、協力することができる人間関係を育むことを意識した話合い活動が必要だと考えた。

また、生徒たちの諸活動を支援していく中で、生徒指導の充実を意識するようになり、生徒指導の本来の目的を考える必要性を強く感じてきた。文部科学省国立教育政策研究所生徒指導リーフ「特別活動と生徒指導」の中に、特別活動は「生徒指導にとって最も重要な教育活動の場」と記されている。このことから、学級活動で、生徒指導の機能を意識した実践を行いたいと考えた。中でも、人間関係の希薄さという問題点を改善すべく、生徒指導の機能のうち、共感的人間関係の育成を重視した取組を行いたい。

これらのことより、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、共感的人間関係が育まれることで所属感が高まり、自他の向上のために積極的に活動する生徒の育成につながると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

学級活動で話し合い活動を行う際、プロセスシートと相互評価カードを用いて、共感的人間関係の育成を図ることで、自分のためにもなり、他者のためにもなるような自己決定をしようとする生徒が育つであろう。

4 研究の方法

- (1) 文献や先行研究を基にした共感的人間関係の育成に関する理論研究
- (2) 共感的人間関係と自己決定に関する生徒の実態調査
- (3) 共感的人間関係の育成を意識した学級活動の授業実践を行い、生徒の発言や態度、ワークシートへの記述等を基にした検証と考察

5 研究内容

- (1) 共感的人間関係の育成に関する理論研究を基に、授業における効果的な指導方法を見いだす。
- (2) 共感的人間関係に関するアンケートを実施し、その結果を分析して生徒の意欲の高まりや考えの変容を分析、考察する。
- (3) 所属校の2年生において、検証授業①「話し合い名人を目指そう」、「学級生活を見直そう」、「生徒会の一員として」（3時間）と、検証授業②「思いやりのあるコミュニケーション」、「学校での学習を充実させよう」、「理想の最上級生になろう」（3時間）を用いた授業実践を行い、仮説を検証するとともに、手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

中学校学習指導要領解説特別活動編には、「生徒指導のねらいである自己指導能力や自己実現のための態度や能力の育成は、特別活動の目標と重なる部分もある。この意味で、生徒指導と特別活動との関連は極めて深いといえる」²⁾とある。また、坂本は、「特別活動の『学級活動』は、学級を単位とするきめの細かな生徒指導が行われる場である。すなわち、学級活動は、生徒指導の機能がそのまま作用しうる教育課程内の唯一の領域といえる」³⁾と述べ、生徒指導の機能を作用させる場として学級活動がふさわしいことを示唆している。生徒指導の一層の充実が求められている中で、学級活動の果たす役割が大きくなっていることがうかがえる。

また、生徒指導提要には、生徒指導は個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すもので、そのために、日々の教育活動において、児童生徒に自己存在感を与えること、共感的な人間関係を育成すること、自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意することの重要性が記されている。そして、坂本は、「人は孤立して社会生活を営むことはありえず、つねに特定の社会の一員として生活していかなければならないという意味においても、共感的な人間関係の育成は重要な課題である」⁴⁾と述べており、人間関係の希薄さという問題点を改善するためには、生徒指導の機能のうち、共感的人間関係を育成する視点を指導者がもつことが必要だと考える。さらに、相原らは、「学級活動の目標の中の望ましい人間関係を形成するとは、自分の素直な考えを表明しても相手が受け止めてくれるので安心して相手と関わられるような人間関係を学級の中に形成することである」⁵⁾と述べている。このように安心して相手と関わることができるような人間関係を共感的人間関係と捉える。

- (2) 研究の構想について

本研究では、理論研究を基に、共感的人間関係を「他者を受け入れ、安心して自分を表現できる

人間関係」と定義する。共感的人間関係を育むためには、学級活動の話合い活動において、他者の考えを聞き、自分の考えを出しやすくする手立てを取り入れることが必要だと考えた。共感的人間関係を育むことで、自分のためにもなり、他者のためにもなる自己決定を促すことができると考え、研究の構想を立てた(図1)。

(3) 共感的人間関係の育成及び自他の向上を目指した自己決定を促す授業の進め方

授業の流れの中で、ペアでの話合いで「プロセスシート」、話合いに関する相互評価で「ほめるカード」、実践に関する相互評価で「メッセージカード」を使い、共感的人間関係の育成を図ることをねらいとした(図2)。

ア プロセスシートについて(資料1)

他者の発言をじっくり聞き、自分の考えを発言しやすくするためのワークシート(プロセスシート)を作成した。プロセスシートとは、「つながる」の部分(資料1 囲み)で、できるだけ多くの質問をさせ、考えを具体的にさせていくことと、内面の心情を引き出すことをねらいとしたものである。「かんがえる」の段階で自分の考えを書き、ペアの相手と交換し、相手の考えを確認した後、「つながる」の段階で、自分の考えと共通している部分には、「おなじ!」、よい考えだと思った部分には、「いいね!」のシールを貼り、まず相手の考えを認める気持ちを伝えるようにする。「つながる」の場面では、お互いの考えに対して「ききたい!」シール(資料1 中央)を貼りながら質問をし合い、相手が答えたことを枠の中に書いていくようにする。関連した質問は線でつないだり、丸で囲ったりしながら話を進めていく。「どうして?」「例えば?」「具体的には?」など、1つの考えに対して掘り下げる質問を繰り返していくようにする。質問が繰り返され、話合いが深まることで、「きめる」の段階で、具体的で自他の向上を目指した実践目標の設定を促すことができると考えた。プロセスシートは、伝え合った内容を記入することにより、自分の思考の過程(プロセス)を確認させるねらいもある。

イ 相互評価カードについて

本研究における相互評価カードとは、「ほめる

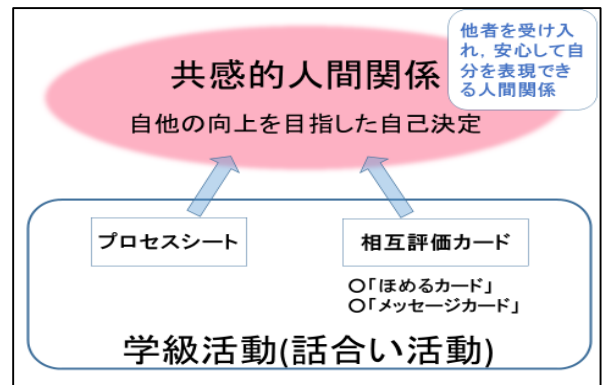


図1 研究の構想

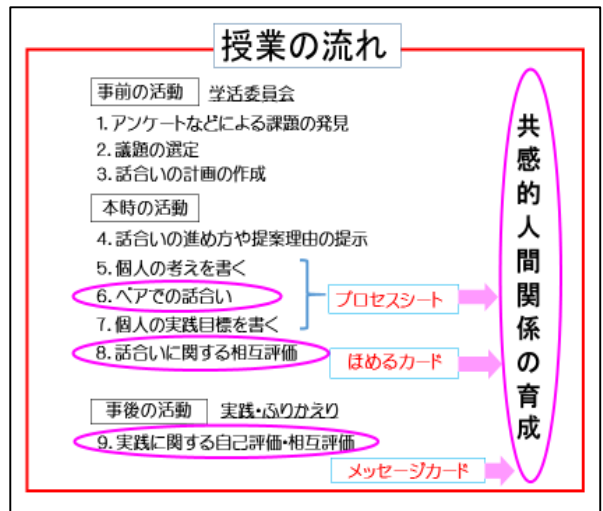


図2 授業の流れ

資料1 プロセスシート

カード」と「メッセージカード」を指す。

(ア) ほめるカードについて

相手のよさを見つける視点に気付いたり、褒められたことを生かそうとする意欲を育てたりするために、「ほめるカード」と称したカードを用いて相互評価を行った。互いのよさを見つけ、他者を受け入れる態度の素地をつくるために、授業の話合い活動の中で、互いの話し合う態度や発言の内容などについてよかった点をほめるカードに記入させ、ペアの相手と交換させた。その際、生徒たちが考えた、話すとき、聞くときに必要なスキルをそれぞれ10個ずつまとめた「話合い名人への道」を参考にさせたり、相手の考えの内容のよかった点を挙げさせたりして、褒める視点を分かりやすくする支援をした。

(イ) メッセージカードについて

授業後1週間の実践について、できていたことを認めたり、励ましたりする相互評価をメッセージカードを用いて行った。実践について、頑張ったことを認められたり、励まされたりすることで、友達から受け入れられていると感じ、次の実践への意欲につながると考えた。

なお、話合いや相互評価の形態を、出番を確保することと、じっくり人間関係を深めることを意図してペアとした。

これらの有効性を検証するために、2つの視点を設けた。

【検証の視点Ⅰ】 プロセスシートと相互評価カードを用いることにより、共感的人間関係が育まれたか

【検証の視点Ⅱ】 共感的人間関係の育成により、自他の向上を目指した自己決定を促すことができたか

(4) 授業の実際

研究の仮説を検証するために、授業実践を行った。中学校第2学年の学級活動内容(1)「学級や学校における生活上の諸問題の解決」で話合い活動を実践した。本実践では、ペアで課題を共有し、質問し合うことで互いの考えを深め、自分のためにもなり、他者のためにもなるような自己決定をしようとする態度を育むことをねらいとした。

ア 題材名 「理想の最上級生になろう」内容(1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

イ 題材と生徒の実態について

本題材は、最上級生としての自覚を育てるとともに、心構えをもたせる内容である。後輩から憧れの気持ちをもたれ、学校のリーダーとしてふさわしい言動ができる最上級生とはどのようなのかについて、お互いの考えを掘り下げていくことを大切にして、話合い活動を行わせるようにする。そして、自分自身に先輩から受けた影響があることや先輩がいることのよさなどにも気付かせるとともに、1年生に先輩としてどのような影響を与えているのかを振り返らせることで、話合いをより深めさせる。

本学級は、あと2ヶ月で最上級生になるのを前に、次年度の生徒会役員も決定し、いよいよ自分たちが学校を引っ張っていかなければならないという雰囲気が出てきている。しかし、学校での最上級生の役割や、ふさわしい言動について具体的に考えている生徒は少ない。

ウ 本時の目標

最上級生とはどのようにあるべきかを考え、話合いで考えを掘り下げることにより、理想の最上級生になるために一人一人が努力し、最上級生として共に向上していこうとする態度を育む。

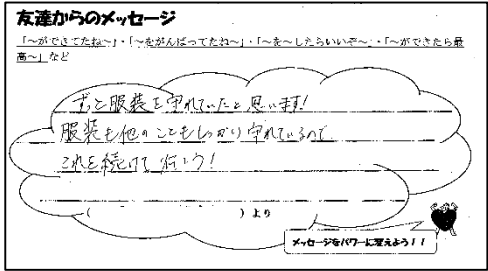
エ 指導の過程

(ア) 本時の展開(プロセスシートの生徒のやりとりや記述例を太囲みで示す。)

	活動の内容	指導上の留意点, プロセスシートのねらい(吹き出し)
活動の開始	1 題材と議題を確かめる。 議題: 学校生活での「理想の最上級生」とはどんな人だろう	○学活委員から, アンケートの結果について考えたことを述べさせた。 ○学活委員で進行させた。
	2 自分の考えを書く。 1, 2年生からいいと思われる人	○時間をかけて, 全員が書くまで待つようにした。 議題に対して考えを書く。(抽象的な考えが多い)
	3 話合いの進め方について聞く。	○前回の良い例(質問の数が多い)を示して, プロセスシートの使い方を再確認した。
	4 ペアをつくり, 議題を確認する。	○隣の席同士でペアを組ませた。
活動の展開	5 話し合う。 (1) お互いに質問をして, 考えを伝え合い, 価値付けをする。 Q. 「いいと思われる」とはどういうことですか? A. 手本になる人です。 Q. 具体的にはどんな人ですか? A. 勉強に集中する人です。 Q. 例えば誰ですか? A. R先輩です。 Q. R先輩は他にどんなところがいいですか? A. 部活に真面目に取り組んでいるところです。	○相手の考えとの共通点やよい考えを見つけたらシールを貼るよう促した。 ○質問をして相手が答えたことをメモさせ, 話合いの過程を可視化させた。 ○話合いが深まらないペアには, 以下のような質問の例を提示した。 質問を繰り返して, 考えを掘り下げていく。 ・なぜそう思うのですか。 ・これまで先輩として, 1年生にはどんなふうに接するように心掛けていましたか。 ・これまで先輩にしてもらったことで嬉しかったことを教えてください。 ・最上級生として必要なことは何だと思いますか。
	(2) 伝え合った考えをペアでまとめ, 黒板に掲示する。 「理想の最上級生」って・・・ 1位 勉強と部活ができる人 2位 優しい人 3位 まとめることができる人	○ペアで話し合ったことを生かして, 議題に対するまとめを行う。 ○ペアで話し合った過程をプロセスシートで振り返ってまとめるように助言した。 ○お互いに共感したり, 考えが深まったりしたものを上位にランキング形式でまとめるようにさせた。 他のペアがまとめたものも参考にする。
	6 1年生からのメッセージを聞く。	○1年生から憧れをもって見られていたり, 感謝されていたりすることを自覚することができるメッセージを伝えた。

	<p>7 個人の実践目標を決定する。</p> <p>部活や勉強にあきらめないで真剣に取り組む姿を見せる</p>	<p>本時の思考過程を振り返る。(具体的で自他の向上を目指した目標に)</p>
活動のまとめ	<p>8 活動の振り返りをする。</p> <p>私には全然思いつけなかったことを、たくさん考えていたので、良かったです。</p> <p>相づちもうってまいてくれたので、はたしめやすかったです。</p> <p>9 教師の話を聞く。</p>	<p>○話し合いを振り返り、「話し合い名人への道」のスキル項目を参考にするなどして、ほめるカードで相互評価させ、さまざまな視点からプラスの評価を行うよう助言した。</p> <p>○最上級生としてふさわしい言動ができるようになることが、学校活動を支えていくことにつながることを伝えた。</p>

(イ) 事後の指導と生徒の活動

日時	活動の内容	指導上の留意点
2月3日 ～ 2月6日	<p>○目標を意識して、学校生活の中で実践する。</p> <p>○実践の振り返り</p> 	<p>○ペアの相手の実践目標を意識するよう、折に触れて声をかけた。</p> <p>○担任の目から見た生徒の変容について気付きを話すよう心掛けた。</p> <p>○毎日帰りの会で、「ふりかえるカード」に自己評価を記入させ、実践の啓発を行った。</p> <p>○最終日の帰りの会で、メッセージカードで相互評価させた。その際、プラスの評価を行うよう助言した。</p>

カ 授業の考察

(ア) 【検証の視点Ⅰ】プロセスシートと相互評価を用いることは、共感的人間関係の育成に効果的であったか

a プロセスシートより

共感的人間関係を、他者を受け入れ、安心して自分を表現できることとして、相手の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができたかをプロセスシートの記述から考察する。方法は、考えの伝え合いが何回行われたかを、「ききたいシール」の数で見ることとする。その結果、第1時(1月)では、考えを伝え合った回数が一人あたり平均 1.1 回だったのが、第3時(2月)では一人あたり 3.8 回になっていた(図3)。相手の考えを受け止め、自分の考えを伝える活動が活発になっていることが分かる。

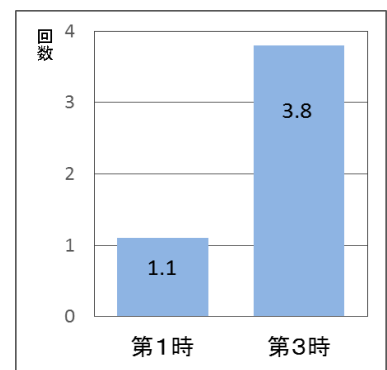


図3 伝え合った回数の変化

さらに、考えの深まりについて考察する。同じくプロセスシートの伝え合いの記述から、1つの考えについて具体的に掘り下げている質問の回数を「ききたいシール」の数で見ることとする。岩瀬らは、話し合いは、第3階層以降まで考えを掘り下げること十分深まることを述べている。

これを基準とし、掘り下げる質問が3回以上できた生徒をA、2回をB、1回以下をCに分けた。その結果を、第1時と第3時で比較すると、Aが13%(3名)から58%(14名)に増え、Cが79%(19名)から25%(6名)に減った(図4)。これらのことから、プロセスシートを用いて、「つながる」の段階で、考えを伝え合う活動を充実させたことで、多くの伝え合いができるようになり、考えをより深めることができるようになっていることが分かる。

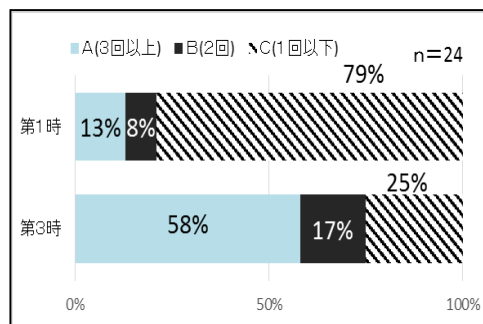


図4 考えの深まりの度合いで見た生徒の割合

b 相互評価カードより

他者を受け入れる態度が育成されたかを、第3時後の生徒のほめるカードとメッセージカードについての感想の記述から考察する。ほぼ全員が「自分のことをきちんと評価してくれていることがうれしい」などと級友から受け入れられていることを好意的に感じている内容を書いていた。「話し合い名人への道」で相手のよいところを見付ける視点の例を提示したり、視点を広げるように助言したことで、よいところを見付ける視点が増えていき、相手を受け入れようとする態度が育ってきたと考えられる。このことが自分の考えを出しやすくする状況を生み出し、話し合いの深まりにつながったと考えられる。

これらのことから、プロセスシートの中で考えを伝え合う活動を充実させたことと相互評価を行わせたことは、相手の考えを受け入れ、自分の考えが出しやすくなるような共感的人間関係の育成に有効であったと考える。

(イ) 【検証の視点Ⅱ】共感的人間関係の育成は自他の向上を目指した自己決定を促すことに効果的であったか

共感的人間関係が育まれたことが自他の向上を目指した自己決定を促す効果があったかを「考えの深まり」と「自己決定した実践目標」の相関関係で見ることとする。共感的人間関係については、プロセスシート内の考えの深まり(図4第3時参照)で見ると、生徒が自己決定した実践目標については、自他の向上を目指したのか、自己のみの向上を目指したのかで分ける。その結果、第3階層以降まで考えを深めたAの生徒が確実に自他の向上を目指した目標を書けるとはいえなかった。しかし、複数回考えを掘り下げることができたA、Bの生徒ほど自他の向上を目指した自己決定をする傾向が見られた(図5)。このことから、共感的人間関係の育成が自他の向上を目指した自己決定を促すことに効果があったと考える。

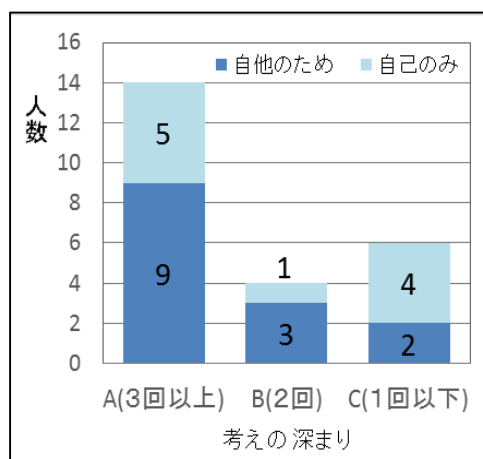


図5 考えの深まりと自他の向上につながる自己決定

キ 事前・事後アンケートからの考察
話し合いや日常生活について、事前(10月)・事後(2月)に行ったアンケ

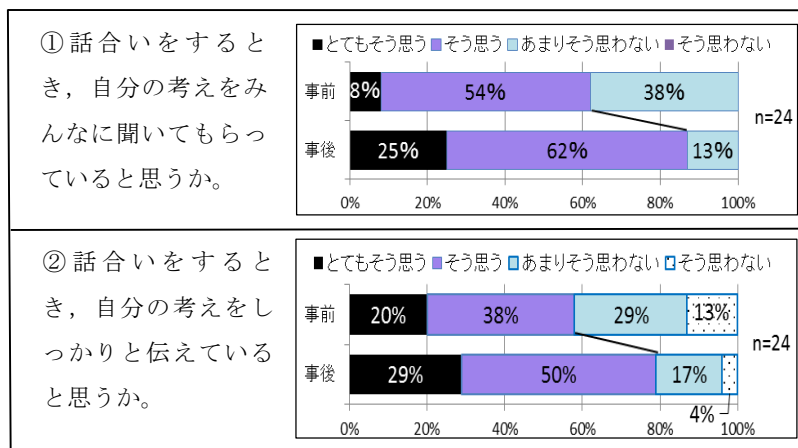


図6 事前・事後アンケート結果 1

ト結果を比較した(前頁図6, 図7)。話し合いについては、「話し合いをするとき、自分の考えをみんなに聞いてもらっていると思うか」という質問に、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、62%(15名)から87%(21名)に増えていた(前頁図

③学級の中で、みんなのためになることを見つけ実行できていると思うか。

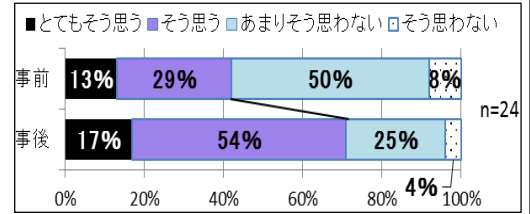


図7 事前・事後のアンケート結果 2

6①)。「話し合いをするとき、自分の考えをしっかりと伝えていると思うか」という質問に、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、58%(14名)から79%(19名)に増えていた(前頁図6②)。また、「学級の中で、みんなのためになることを見つけ実行できていると思うか」という質問に、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、42%(10名)から71%(17名)に増えていた(図7)。これらのことから、共感的人間関係が育まれ、それにより学級への所属感が高まり、自他の向上を意識した自己決定ができるようになってきたと考える。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究を通して、自他の向上を目指すような自己決定をしようとする生徒の育成のためにとった手立てには、次のような効果があることが分かった。

- ・ プロセスシートを用いて話し合いを深める活動をする 것과プラスの相互評価を行ったことは、他者を受け入れ、安心して自分を表現できる共感的人間関係を育む効果があった。
- ・ 共感的人間関係を育むことで、学級への所属感を高め、自他の向上につながる自己決定を促す効果があった。

(2) 今後の課題

- ・ 共感的人間関係を育む話し合い活動を継続的に行い、更に学年全体、学校全体に共感的人間関係の構築を図る。
- ・ 集団の向上を強く願う生徒を育成するための効果的な活動の工夫と指導方法について、更に研究を深める。

《引用文献》

- 1)2) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 平成20年 p.92, p.23
- 3)4) 坂本 昇一 『生徒指導の機能と方法』 1990年9月 文教書院 p.11, p.19
- 5) 相原 次男・新富 康央・南本 長穂編著 『新しい時代の特別活動』 2011年3月 ミネルヴァ書房 p.47

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『生徒指導提要』 平成22年4月
- ・ 文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導リーフ 『特別活動と生徒指導』 平成24年6月
- ・ 大塚 忠剛編著 『支持的風土づくり』 昭和62年10月
- ・ 岩瀬 尚樹・ちよん せいこ著 『よくわかる学級ファシリテーション②』 平成24年12月
- ・ 井上 裕吉編 『中学校学級活動話し合い活動の実践相談と指導技術』 1994年2月